

医療施設の外装色彩に関する基礎的調査研究

九州産業大学大学院工学研究科 学生会員 大淵浩嗣
九州産業大学工学部 正会員 山下三平

1. はじめに

景観法に基づく景観計画と従来からの景観条例では、景観をコントロールする基準として、色彩を重視する傾向がある。色彩は比較的数量化しやすく、指導による変更も比較的容易だからである。こうした景観色彩コントロールをよりきめ細かく実施するには、対象施設の特徴に応じた基準やガイドラインを考える必要があるだろう。そこで本研究では、医療施設に注目する。

医療施設においては施設を利用する患者に不安を与えず、快適性を享受できるような配色が必要である。このため、内装色は患者の心理的影響を考慮して設計する傾向がある。これに対して外装色は、建物の第一印象を決定づける要因であるが、これまで景観色彩の面からの検討が十分になされていない。

そこで本研究は、福岡市の博多区、東区および中央区にある医療施設の外装を測色調査する。それにより、医療施設の外装色の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

JIS 標準色票¹⁾を用いて、医療施設の壁面の基調色、補助色および強調色を測色する。建物の1番大きな面積を基調色、2番目に大きな面積を補助色とし、面積は小さいが、建築物のアクセントに用いられる色彩を強調色とする(図-1)。

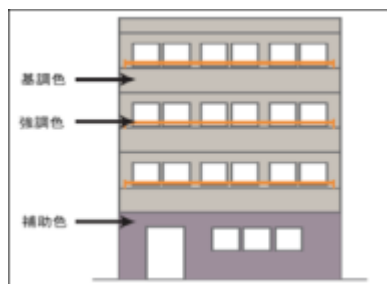


図-1 測色箇所の分類

本研究では、福岡市内で人口がとくに集中し、医療施設が多い博多区、東区および中央区の医療施設を測色の対象とする。ただしその際、2F以上また地下にある医療施設は対象外とする。医療施設は病床数と出現頻度を考慮して、病院、一般診療所および歯科診療所に分類する。

3. 結果

3-1 医療施設における外装色の概要

図-2~4は福岡市博多区、東区および中央区における医療施設の外装色について色相、明度および彩度の分布を示す。

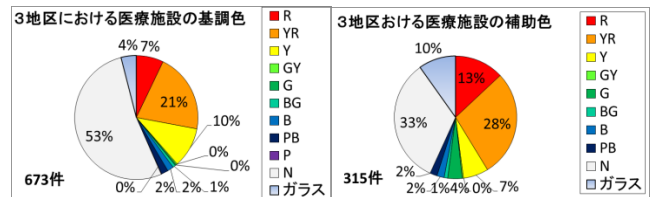


図-2 医療施設の基調色と補助色の概要

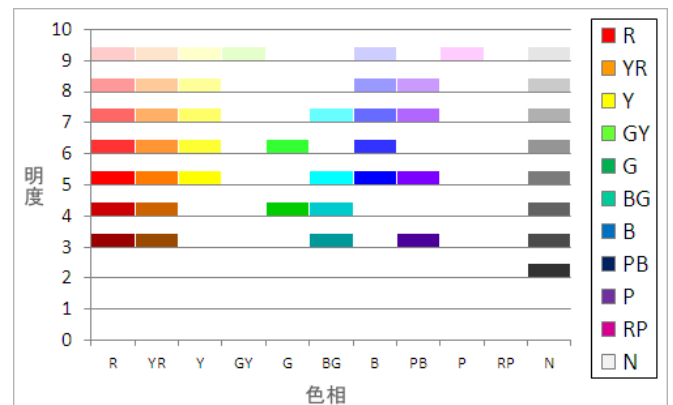


図-3 医療施設の色相と明度（基調色）

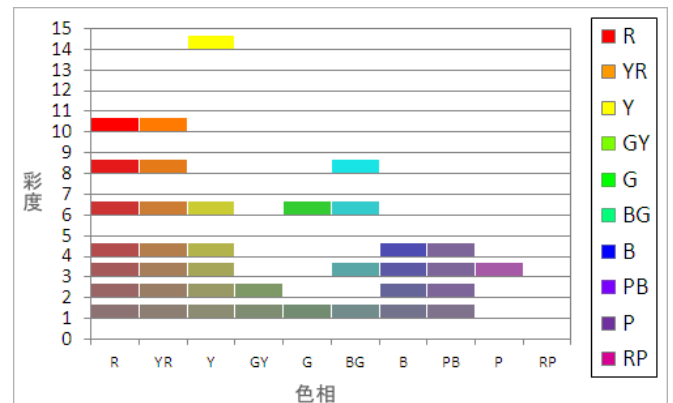


図-4 医療施設の色相と彩度（基調色）

基調色は、無彩色（53%）が過半数を占めており、ついで色相として黄赤（21%）、黄（10%）などの暖色系が多い(図-2)。補助色でも同様の傾向が見られるが、基調色に比べて無彩色が2割ほど少ない(図-2)。明度の範囲はマンセル値で2~9と幅広い(図-3)。彩度の範囲はマンセル値で1~14とこれも幅広い。全体的に低彩度の色が多いが、暖色系の黄で一部高彩度の色も使われている(図-4)。医療施設の基調色として白を含む無彩色を選ぶことを基本とし、補助色として暖かい

色あいをも明度、彩度とも幅広く選択していることが垣間見える。

3-2 医療施設と他の建築物との比較

つぎに、その傾向と他の建物との比較をして、医療施設の色彩の特徴を検討したい。そのために、福岡市内の大規模建築物等と中央区の景観形成地区（天神地区）を扱う^{2) 3)}。なお福岡市では大規模建築物等と景観形成地区の建物は条例で色彩の指導が行われている。

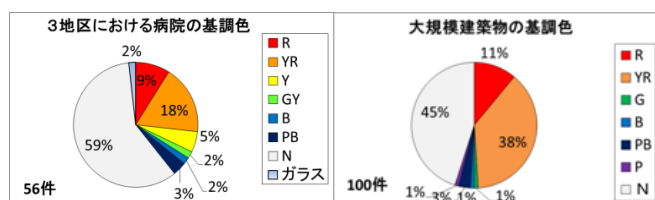


図-5 博多区、東区、中央区の病院と福岡市内の大規模建築物等の比較

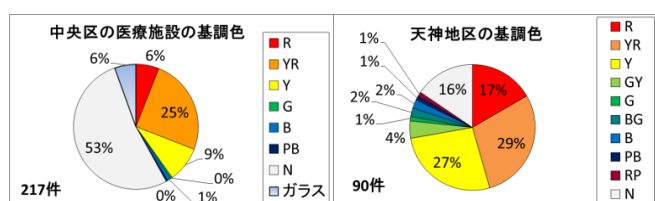


図-6 中央区にある医療施設と景観形成地区（天神地区）の比較（例）

まず、大規模建築物等との比較である（図-5）。ともに無彩色の割合が多く、ついで赤、黄赤などの暖色系が多く似た傾向を示す。ただし、病院の色相としては無彩色が59%を占め、大規模建築物等の45%を14ポイント上回り特徴的である。一方、大規模建築物等では、黄赤が38%、赤が11%と無彩色について支配的な色相となり、病院と比較して暖色系に偏る。

つぎに中央区の医療施設と中央区の景観形成地区である天神地区の建物との比較である（図-6）。医療施設は無彩色の割合が53%で、天神地区の16%を上回る。

このように医療施設においては白系の色相の使用が特徴であり、そうすることで清潔感を表す傾向があることが示唆される。

3-3 駅からの距離と色相との関係

ここで対象地域の主要駅（JR博多、JR香椎および西鉄天神）からの距離と色相との関係を検討する。医療施設では外装色として無彩色の使用が特徴と示唆される一方、暖色系を含む多様な色が使われている。外装の色彩が医療施設の存在をアピールするためのものでもあると仮定すれば、その必要性は施設が人目にふれる頻度に関係すると考えられる。そこで駅から各医療施設までの距離を、徒歩圏500m以内と500m～1000

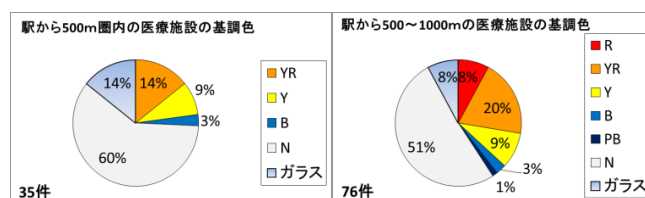


図-7 駅から500m圏内と500～1000m圏内における医療施設の比較

mに分けて基調色の使われ方を整理すると、前者では無彩色が60%に対し、後者では51%になる（図-7）。このように遠くにある医療施設では、より多様な外装色相が選ばれる傾向がみられる。なお福岡市では色相についての景観指導はしていない。

3-4 病院、一般診療所および歯科診療所ごとの比較

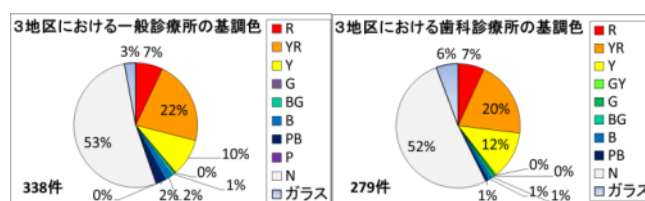


図-8 3地区の一般診療所と歯科診療所の色相の割合

さいごに、病院、一般診療所および歯科診療所の間の外装色の比較を行う。病院の基調色は無彩色が59%であり、暖色系が32%である（図-5左）。一般診療所の基調色は無彩色が53%、暖色系が39%であり、歯科診療所の基調色は無彩色が52%、暖色系が39%である（図-8）。各医療施設ともに似た傾向をしているが、無彩色は病院での割合が大きい。総合的な病院よりも専門性が高い診療所の方がより個性的な色相を使う傾向がみられる。また病院より小規模の診療所では、より外装色の扱いに敏感であるとも考えられる。

4. おわりに

本研究では、景観形成基準やガイドラインで数値化しやすく、景観計画や景観条例で重視される、景観の色彩を扱った。本研究ではとくに、医療施設の外装色の実態調査に基づき、その特徴を明らかにすることを試みた。その結果、医療施設では無彩色の使用が特徴と示唆された一方、人々へのアピールの必要性に応じた色使いがなされていることが示された。

<参考文献>

- 1) 日本規格協会: JIS Z 8721 準拠 標準色票 光沢版, 1993.
- 2) 八島 慶太, 夕部 洋裕: 福岡市の色彩的特徴の把握, 九州産業大学, 卒業研究, 2006.
- 3) 濱 和也, 山川 敦: 都市景観の色彩に関する基礎的研究, 九州産業大学, 卒業研究, 2007.